



慶應義塾大学ビジネス・スクール

非指示的に教えるということ

ー 学習者が自己と向き合い、新たな自己を獲得することを支援する教え方 ー

5

ハーバード大学名誉教授 C.R.クリステンセンの著書「ケースメソッド実践原理」には、その第5章に「指示的か非指示的かを選択する」という章がある。この章の前書きには「教育上、重要な選択に関する問題である」「教師の選択いかんによって、知識の獲得と創造に関する学生のレベルが決まるといっても過言ではない」とあることから、私たちがケースメソッド教育への理解のレベルを一段階高めようとしたときに、避けては通れない重要なポイントなのだと思う。

あるとき私は、わが師である高木晴夫教授に、「指示的・非指示的ということについての先生の考えをお聞かせいただきたい」とお願いして、時間を取ってもらったことがあった。そのときの会話はまるで「仙人との会話」のようだったと今でも思い出される。それは確か、次のようなやり取りだった。

仙人との会話

20

これから話すことは「あくまでも私の理解」なのだけれどね。

指示的に教えるにしても、非指示的に教えるにしても、「教える側」の立場から考えるより

このノートは慶應義塾大学ビジネス・スクール博士・修士課程併設科目「ケースメソッド教授法特論」の教材とするために、竹内伸一(ケースメソッド教育研究所)が作成した。(2004. 11)

本ノートは慶應義塾大学ビジネス・スクールが出版するものであり、ノートの複製等についての問い合わせ先は慶應義塾大学ビジネス・スクール(〒223-8523 神奈川県横浜市港北区日吉本町2丁目1番1号、電話 045-564-2444、e-mail case@kbs.keio.ac.jp)。また、ノートの注文は<http://www.kbs.keio.ac.jp/case/index.html>。慶應義塾大学ビジネス・スクールの許可を得ずに、本ノートのいかなる部分の複製、検索システムへの取り込み、スプレッドシートでの利用、またはいかなる方法(電子的、機械的、写真複写、録音・録画、その他種類を問わない)による伝送は、これを禁ずる。

Copyright©2004 は慶應義塾大学ビジネス・スクールが保有する。